

## 第7章

## 2つの世界戦争の間の内国伝道とディアコニー

(1914-1945)

1

## 第1次世界大戦中の内国伝道

第1次世界大戦が1914年ヨーロッパ諸国で突然始まり、ついに全世界を戦争に巻き込んだ時、内国伝道戦場ディアコニーは1864年、1866年と1870年の戦争においてなされた以上のことは考えられなかった。

戦場での、また前線での直接の救急業務は全て赤十字の手にあった。しかしながら、内国伝道は、彼らの家と施設を、戦病兵の野戦病院と回復施設として、自由に使わせた。憐れみの町ベートルだけは、第1次世界大戦の間全部で3万9千人の兵士の看護をした。

内国伝道中央委員会は1914年10月26日、国防省に従軍牧師を強化する申請書を提出した。そのことについて、内国伝道中央委員会は「病人看護と兵役に従事しているディアコン・・・・伝道者、伝道者養成学校の年長者は・・・<sup>ほっかい</sup>牧会の務めを行ない、それと並んで本来の務めを行って、牧会の補強に貢献するように」求めた。そこで軍隊牧会に500人をこえるボランティアが軍隊から応援に来た。

冊子、聖書、分冊聖書、そしてキリスト教文書による文書伝道は前線でまた後方でおこなわれた。

ところが、内国伝道はとりわけ故郷の精神的道徳的状况にその注意を向けた。彼らは10年間の道徳活動と救護活動を通して、国民生活の真の状況を知った。彼らは率直にものを言うことができた。福音主義の青少年男女のグループはこの間、道徳心向上にかかわる諸問題に取り組んでいたのである。

人は、今や戦時中の性的退廃と危機に反対し、キリスト教の義務を

果たそうとする大衆の広範な同意を得ていた。軍部と市民課のトップへの数え切れない陳情は、責任ある人たちが国民の道徳的墮落に介入するように懇願していた。売春宿の廃止、売春の撲滅、軍隊と故郷での飲酒の制限が求められた。統計上の証明書類は性病の驚くべき増加を示した。特に青少年の健康上の予防が期待された。その時、責任ある立場にいる人がその気になりさえすれば、どんなに不可能な状況であっても、その害悪を本当に理解できることを、私たちは知っている。だがその際、どんなにしても国が措置する売春だけは別に認められることは明らかだった。

問題が浮上した。責任あるキリスト者たちは、世代交替から起こってくるさしせまった問題に気づいた。結婚前の相手を変える性交の増加、危険な暴力、俗悪な出版物から若者を守ること、国民の健康問題、妊娠中絶と産児制限、性教育、これらは明快なキリスト教の回答を知らせるべきであった。戦中・戦後の経験から努力され、医学博士ハルムゼンは、1922年、内国伝道中央委員会の中に創設した「国民健康研究班」をつくった。〔1〕

これが、第1次世界大戦の只中で始まった大きな国民伝道の努力の中で、ただ1つの前線であった。1916年中央委員会の11月会議で、ロストックの実践神学教授ゲルハルト・ヒルバート、後のライプツィヒの教区監督は、「教会の全国民伝道・内国伝道の特別な使命」という題で先駆的な講演を行った。国民の宗教的・道徳的状況は、伝道する地域で比較がなされるようになった。彼は、一面的な慈善活動と奉仕を、もう一度福音伝道の姿へと向けて活きた福音的なことばの宣教によってなすように求めた。

国民伝道活動は実際に国中の個々の共同体の中に広まり、戦後予期せぬ意味をもつようになった。今は、最初の経験が収集されている。

## ワイマール共和国時代(1918-1933) - 福祉国家の福祉業務 議会 - 国民伝道 - デバハイムの破産と教会の救援

私たちは、歴史的時間の中でまだ身近なところで現代史と呼ぶところに入って行く。私たちはこの時代の非常に近いところにおいて、ある程度失われた歴史の隔たりについて「全くまれな強い予感能力、それに先見の明と予知能力が、このような近くでのひろがり正しく評価し、本質を見つけ出すこと」が必要である。[3]

ここで私たちに本質なことと思われる一つの線を慎重に控えめに示すことが課題となる。

教会と内国伝道は、11月革命の後に、突然、ほとんど準備なしに生まれたまったく新しい国の前に立っていた。内国伝道は教会よりはよい状態にあった。彼らの中から、自由国民教会に来るように呼ばれる者たちがあらわれた。これまでの国教会とは異なって、彼らは自治機関と、働く力をもつ自発的な中央委員会をもっていた。

彼らは、君主制が19世紀に成立し没落するまで、何が古い国家を悪くしていたかを、忘れていなかった。領主たち、大臣、高級官吏たちは、数10年来、直接間接に、この事業を求めてきた。対立が起ったが、国は彼らがあからさまに非友好的な言動をつのらせていくのを見守ってきた。彼らの事業が根本的に疑問視されることはなかった。

新しいワイマールの国は、その輪郭をはじめから持っていたに違いなかった。当分の間は教会に反対する声がりードしていた。根本的な「国家と教会の分離」と、「学校と教会の分離」を明確にすべきだという意向が表明されるようになった。宗教は私事として表明されるようになった。教会開設に対する国の給付はもう認められなくなった。教会は、ひきとめた人たちよりも多くの政界人たちと対立した。社会民主党の内部ではその数を増大していく大規模な脱退運動が始まった。

新しい国は、社会福祉国家また福祉国家という理解にたち、新しい福祉省を創設した。国は根本から政治的に考えて、社会福祉活動の全

体を意のままにし、民間の福祉援護を制限するのが最もよいと思った。国の財政は、社会の困窮を取り除こうとする多くの会計年度で著しく高額になった。[4]

それと同時に、19世紀に準備されてきた発展は、成熟していった。私たちはなお、ヴィヘルンと彼の協力者たちが、ディアコニーを伝道運動と考えて、キリスト者のボランティアと職務遂行に基づいたものにしてしようとしたことを思い出す。施設伝道はそれから発展した。民間の福祉活動と内国伝道の協力のもとに生じた福祉国家は、19世紀の広範な福祉課題を、民間の慈善活動の施設と設備にゆだねた。国は、そのためにかなりの部分で入院にたいする疾病保険の支給基準額と経常の給付金の形で、かなりの出費を引き受けた。国は支出の面を相当節約した。民間の事業は国の事業より少ない支出でなんとかやっていた。

施設ディアコニーと公共の福祉との間のすべてに、よい協力関係が生まれた。国の社会福祉職員の男女の多くは、内国伝道の福祉学校の中で養成された。それに1918年まで、国がキリスト教国と理解されていたことは人的関係をよいものにした。同胞援助はこの分野でこれまで達成できなかったことを可能にしたように、教会は説教と牧会を可能にした。施設活動がよい時も悪い時も、それによって疾病保険政策や賦課を実行できる外国教会の政治的権力に、財政的に依存するようになったことを人は我慢して受け入れてきた。今こうしたすべては疑問視されている。

それから、ワイマール国においても同様に国の福祉事業と民間の福祉事業との協力がなされるようになった。戦後の数年に明らかになった食料封鎖の結果、共和国の多くの部分で克服すべきものではなくなった市民戦争に似た状態、ヴェルサイユ講和条約の意味のない硬直した条件、インフレーションにおける預金の損失、さしせまった厳しい失業の最初の前兆を国に勧告させること、そのどれもが可能な協力と重荷の分かち合いを多くの人の肩に受けてもらえるだけであった。

民間福祉連盟は時の徴を知り、彼らの要求を調整し、互いに上部団体「ドイツ民間福祉事業同盟」を組織した。この同盟は国と交渉した、即ち、しかるべき部局と国の福祉局と交渉した。カトリック中央党の

強い影響力は、ワイマール共和国の政治形成の力になった。即ち、国の福祉費は、民間福祉事業の先端連盟の活動量に見合う一定の基準に従って割り当てられるようになった。

民間福祉連盟は、「ドイツ公益社会福祉施設救済基金有限会社」を設立し、国に対する地位を安定したものにした。すべての援助金と貸付金はここで運営されるようになった。

新しい国との実務的な協力がかもしだす雰囲気は、多くの教会が拒絶しても内国伝道にあっては本心からの介護ができるようになった。かなり根を張った国内裏切り伝説は、ゆがんで間違った前兆となり、ワイマールの国を裏切り国家にしてしまった。[5] このことは後に、加熱した国民の急進主義が、この国を国家社会主義の形の中に突き落としていく、その台頭をゆるした。国と社会福祉連盟の実りある協力にもかかわらず、その多くは過去の疑念を背負っていた。だがこの国が内的な空洞化に追い立てられていく前に、2つの大きな福祉活動基本法が成立した。1922年の国の少年福祉法は、民間の福祉と並んで公共の合法的な福祉が同権であることを表明している。

1924年の福祉保護の義務に関する国の通達は、キリスト教の福祉援助が、非行少年を健全な少年と同じように扱う民間の慈善活動に多くの可能性を与えた。

ここで、社会福祉制度の中に決定的な変化が生じた。これまでの貧民救済は、主に最下層の貧民だけになすものと思われてきた。しかし、世界大戦とインフレーションの結果、社会的変動が起こった。人はみな困窮に陥り、前から十分で安定した資産と所得をもつ外国の援助に依存した。国民はだれでも貧民救済によって保障される権利をもち、緊急の時には、国の援助を求めることが出来るようになった。

そこで困窮者に対する包括的な公共の福祉が組織された。国と都市の青少年福祉事務所が全ての州につくられた。

内国伝道はこの発展を進めた。ラインラントで、またベルリンで、まず福音主義福祉職の教育が始まった。福音主義の国または州の福祉職の教育がなされた。この福音主義青少年奉仕業務と福祉業務、それは本質的に大都市に集中し、非常に綿密かつ大規模な福祉をなした。

すべての教会にこの制度を広めようとする最初の試みは成功しなかった、また各教区に福音主義教会共同体奉仕を開設しようとする提案も、まだ成果のない土地で受け入れられなかった。内国伝道の活動全体についての教会共同体内の関心は、そうした事情にもかかわらず、中部ドイツや東ドイツにおいて、時が熟していなかった。ここでD. オールは開拓的活動を指導した。それにもかかわらず、内国伝道はいたるところで相当の成果をあげた。内国伝道の福音主義病院、保養所、療養所の上部団体は、10万以上のベッドをもつ1万5千以上の施設に統合した。内国伝道は蓄積してきた経験と成果に立って、国と地方自治体のそれぞれにドイツ福祉事業の法律をつくり、共和国のはじめの5年間に決定的な形をつくったことは、驚くことではない。[6]

戦争による損害、施設の貯蓄の損害、またインフレーションの損害といったものは克服できた。かなりの程度まで超過勤務をし、また高齢化した職員は、十分な後継者が再び加わるまで頑張り通した。施設はほとんど完全に現状を維持しただけでなく、たびたび奉仕活動を根本から拡大していった。施設共同体の偉大な献身的な自発性と、活動的な国民教会の中に広がる仲間がこの事業を支えた。インフレーションによって経済的基盤が崩壊した内国伝道の多くの施設は、差し迫った崩壊に直面して、「願いと理解」を訴え、援助を受けた。内国伝道と教会共同体はいっそう近くなり親しさを増した。

内国伝道と体制教会は、以前より一層親密になった。ドイツ福音主義教会連合内のすべての福音主義州教会連合は、1922年に、ヴィヘルンのプログラムにある重要な目標を達成した。中央委員会は、教会連合の中で提携した州教会によって、全内国伝道の認定された代表として成果をあげた。その成果は一致して認められるようになり、その結果、中央委員会はその活動分野で、国、民間福祉連合、カトリックのカリタス、とりわけ世間に対して、教会を代表するようになった。

中央委員会が1919年から1933年までビーレフェルトで(1919)、ブレスラウで(1920)、ミュンヘンで(1922)、ドレスデンで(1925)、そしてケーニヒスベルクで(1928)行った5つの会議はドイツのすべての地区から出たすぐれた専門知識をもつ人たちの全体をあらわしていた。

ここで新しい課題が決議された。ワイマール共和国時代に、第3帝国が誤った道に直接参加したあとをふりかえてみると、そこで語られたすべてが今日私たちに理解できるものではない。だがあの年の困窮と混乱の中で、多くの真の愛と責任が姿をあらわした。

内国伝道内の人たちはそれぞれ、あの年から頭角をあらわしてきた。D. ヨハンネス・シュタインヴェーク牧師は、増えていく事業を必要なものとして、国と地方自治体の円滑な協力を確保するために、活動を中央委員会の中で新しく組織しなおした。〔7〕

シュタインヴェークは、同じようにスウェーデンの介入によって、ヨーロッパの教会の協力が内国伝道の話の中で成功をおさめるきっかけをつくった。スウェーデンの大司教ナタン・ゼーダーブROOMも計画に加わった。1922年9月、彼は内国伝道とディアコニーの最初の大連合会議のためにミュンヘンに行った。そこで「内国伝道とディアコニー大陸連盟」が設立され、代表にスウェーデン、オランダ、フィンランド、オーストリア、ハンガリー、ラトビア、エストニア、スイス、ポーランド、そしてチェコスロバキアの国が加入した。

ここでドイツに影響を及ぼした戦後の憎しみに充ちた雰囲気、キリストの愛のしるしの中にはっきりとあらわれ、ドイツ内国伝道にとって過小評価できない助けと勇気を意味した友好活動が始まった。敗戦し、多くの傷を受けたドイツの最困窮者たちにすぐに役立つ救援物資が他国から入ってきた。内国伝道の多くの施設は、存続のために非常に苦労したが、その重要性はほとんど評価されなかった。その年、内国伝道のドイツ国外の事業はプロテスタントの世界教会の協力の道を開くのに重大な貢献をした。

ドイツにおける国内の対立はますます深刻になった。右へ左へと変わる政治の急進化は強く注意を引いた。教会に反対する流れが入ってきた。無神論者連盟は、キリスト教に対する闘いを強めた。第1次世界大戦の時に始まった国民伝道は時代の要請であった。国民伝道部門と国民伝道ドイツ福音主義教会連盟の指導者である牧師 D. ゲルハルト・フルクルーク(1870-1948)は、増大する労働者階級を結集するために、聖書週間運動の創設者D. ハイน์リッヒ・レントルフの参加が重

要だと思った。

1920年、フルクルークは内国伝道プレスラウ会議で次のように計画をのべた。

「私たち福音主義教会は伝道する教会であろうとしているのか、それともカトリック教会の列の中の支持者層に墮落するか、または、いやいやながら黙認しているだけの国による、特に評判がよいというわけでもない文化施設という一つの必要悪になろうとしているのか。内国伝道はいまやわが国民の内奥の伝道になろうとしているのか、またはいつも金不足の福祉施設や慈善の戦う全体、すなわち、巨大な病院列車にとどまるのか。伝道思想を断固として受け入れ、これを貫く決心をし、教会と内国伝道が提携する共同体であろうとするのか、あるいは、その活動がユダヤにおいてのみ見られるように、静かに他に広がり、異邦人の道をさまよう、教会の中の小さな教会になろうとしているのだろうか。内国伝道は教会と地域共同体との仲介業務をしようとして申し出た。なぜならば、それは教会の自由な娘としての信仰深い教会共同体の活動であり、また、それは真の教会でなければ考えられないことであるから、また、内国伝道は自由な共同体と同じ状態にあり、内部に神の言葉と意志のみがあり、新しい愛の掟がイエス・キリストに結ばれている。しかし、その活動と目的において教会政治の動向と検討したこと、また色々な他の前提条件が配慮されてこなかった。」<sup>[8]</sup>

まず第1に、人は国民伝道のなかで、眠れる教会共同体が怠惰から目を覚ますようにした。彼らは共同体伝道を進めた。余暇の時、また教会や教区会館における礼拝の催しの時に、元気な教会共同体の人たちは、この国民伝道の仲間を支え、教育し集めようとした。というのは、その時だけ福音伝道を始めた国民伝道の第2の課題が可能であった。福音伝道者は中央委員会によって採用された。1900年の頃は、疑いをもって見られ、また実際に拒まれた福音伝道運動との協力が始まった。

国民伝道内でトロンボーン楽団伝道も活動した。多くの地域に支部ができ、内国伝道にこの奉仕事業の真の担い手がいた。ディアコーンはその忠実な協力者であり先駆者であった。この事業の真の創設者は



エドワルド・クーローであった。彼の息子、牧師D. ヨハネス・クーローは、1893年に父ボーデルシュヴィンクによってシオン教会の牧師と兄弟の家ナザレの責任者として招かれ、事業を継続し拡充した。彼は精鋭の6重奏団と多くの旅をし、彼の教育活動を通して、そこからトロンボーン楽団が生まれ、ドイツトロンボーン楽団として伝道をし、その道を開いていった。

ところで、1933年、すべてのトロンボーン楽団が「ドイツ福音主義トロンボーン楽伝道」に集まった。彼らは、特別な危険に身をさらすことになるにもかかわらず、いわゆる「第3帝国」のすべての困難を寛大に克服していくことができた。

国民伝道の第4の形が護教活動の中で起こった。

1921年、ベルリンでDr. カール・シュヴァイツァー牧師が指導する中央委員会によって「護教センター」がつくられた。ここであらゆる精神的、世界観的潮流がおこり、党派の活動がほどよくなされ、そのための学問的な資料が作成された。国民伝道の牧師と協力者はここで教育課程をつくった。

4学部のすべての学位をもつ博士、ラインホルト・ゼーベルグ教授は、1923年、中央委員会の長として招かれ、ベルリン大学に社会倫理研究所と内国伝道学をつくった。それと同時に、護教活動は拡大し、深められた。

広報活動は「ドイツ福音主義出版協会」の中で拡大した。日曜新聞のつくりは精度の高い芸術写真付となった。映画の活動が始まった。国の映画検査所と協力して、俗悪出版物とわいせつ作品に対する闘いを開始した。内国伝道に関しては、オペリンハウスにおけるろうあ盲人の「語り手」となった活動に関する映画撮影がなされた。活動は広い分野におよんだ。

絶望的な戦争の後に起こった大規模な社会的困窮は、住宅難にあらわれた。100万人のドイツ国民が帝国領土を離れ、残った領土に流出した。すでに1919年およそ100万人の住宅が足りなかった。住宅難はこれまでドイツが経験したことがないほどひどいものになった。住居空間の統制は災害を解決できなかった。専門家は健康的道徳的な結果が

壊滅的であると報告した。結核と性病がはやった。ヴィヘルンと彼に従ったフリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンクは、家族を養うための基本的条件として健康的な住宅建築を説き、「労働者の家」協会と実践的な方法を教えた。

今やあらゆるところから、内国伝道の枠の中で行動を始めるようにという要求が出された。1924年のペーテル教会大会の社会的使信は「前代未聞」と呼ばれた住宅難に対する、効果的な援助を早急にするように求めた。ドイツ福音主義教会委員会は、1925年アイゼナハで、彼が「住宅難の克服がすべての社会福祉の出発点」であるというありのままの叙述にしたがって決定した。〔9〕

それゆえ、1926年5月20日、中央委員会は「ドイツ福音主義住宅協会デバハイム」[DEVAHEIM]をつくった。ある程度の経験は金融の大きな商取引ですでにしていた。というのはインフレーションの時代のあと、中央委員会は内国伝道の施設の要望に、長期の貸付金調達によって応え、独自の経済部局を組織した。

彼らは手元にある貸付金の要望を確認した。その後、彼らは帝国内務大臣の斡旋によって、ディアコニー母の家、病院、救済施設、介護施設、身体障害者施設、兄弟の家、老人ホームの貸付金の拡充に成功した。1927年、無神論者の国民火葬協会の対策として福音主義死の準備と福音主義保険本部を設立した。再保険によって支えられた内国伝道の巨大な保険事業は1930年、保険金額3万5千200マルクをもつ、被保険者が115万人に達し、内国伝道と教会共同体の施設のために大規模な貸付金額を拡大した。中央委員会も同じように、ここでどうしても必要な財政上の資金源を得た。

デバハイムが着手した住宅金融公庫が創設された時、中央委員会はある程度の資金調達の経験を持っていた。金融公庫運動そのものはドイツでは比較的新しいものであった。イギリスとアメリカでは、すでに長い発展を回顧してもよい段階にあった。

人は新しい領域に足を踏み入れた。それだけに2倍も慎重でなければならなかった。デバハイムは、はじめは堅実な基本方針に従って活動した。1929年2月の初め、金融の達人と自称するヴィルヘルム・イ

エッペルに新しい事業を任せ、不幸が始まった。残念ながら、彼のまったく波乱に満ちた過去を注意深く問う者はいなかった。この「天才的な金融の達人」は、矢つぎばやに、「ドイツ住宅金庫」、「ドイツ債務免除株式会社と目的貯蓄株式会社」のような子会社を設立した。その時、彼は中央委員会の監督部長をあざむいた。監査役はすでに1930年に損失を発見していなければならなかった。

だがイエッペルは、すべてを隠すか、あるいは高い口止め料を支払おうとしていた。イエッペルが行った資本のひどい損失と無責任な投機は破産を加速した。1931年8月、イエッペルが率いた会社は破産申請をした。イエッペルと中央委員会の1人は刑務所に送られた。長い歴史のあとに不名誉な最後を迎えた中央委員会は解散を求められた。破産したあと、ほとんどのすべての部局長が退陣し、無防備を非難するだけでよしとした。中央委員会は組織の緊急補充を続けた。このきびしい制約は中央委員会を萎縮させ、次の数年間はずっと神経質になった。

福音主義保健センターと福音主義予防会は、この倒産した巨大コンツェルンの外部にあった。

貯金者はどのようになったのか？失望した貯金者たちは、その大部分は貧しい階層の人たちであり、抗議大集会で彼らの失望を吐き出した。奇妙なことに教会は内国伝道より大事にはされなかった。その時、「デバハイム」の貯金は内密で教会に任されたのである。

教会と内国伝道は、1918年以来、内々に、互いに接近していた。ベルリンの教会指導部は、内部での連帯責任を避けようとはしなかった。約600万人が困窮し、預金者を満足させるためになんと破産宣告の実行にいたるまで待とうとしたのである。

「これは、設立以来内国伝道が体制教会と貧しい人を援助してきた最も偉大な金融業績であった。それは、改善された目的を価値あるものにしていくものであった。いずれにせよ、ドイツ福音主義教会の内国伝道がそれを自分の問題と感じていたことは、かなりはっきりした証拠によって明らかである。」[10]

それとともに、1933年と1945年の闘争の時代に最初の成果をあげて

いた教会と内国伝道の運命的な連帯と協力の中に、決定的に重要な歩みがあった。内国伝道と教会はドイツ国民に降りかかった歴史的な出来事を通して、互いが無条件に協力するようになった。

## 3

1933年と1945年の闘争の時代 - 内国伝道の計画的な排除  
成長する抵抗運動 - 教会の譲れない事業の内国伝道  
「安楽死」組織 - 崩壊に至るまでの沈黙の奉仕

内国伝道は、いわゆる「権力掌握」後の新しい国に対して、はじめのうちは2つの巨大なキリスト教と共に「総統」に無条件の協力を表明した。内国伝道が教会と肩を並べて闘ってきたのは、若者の荒廃ぶり、失業の呪い、大量の貧窮化、多くの階層の人たちの生きる意欲の崩壊であり、すべては取り除くべきものと思われた。集団陶醉は教会民の列と内国伝道の職員の列の深いところまではいってきた。だが、1933年夏、すでに教会に対する国家社会主義の闘争は燃え上っていた。前線は明らかになり、さらに明らかになった。[11]

内国伝道におけるドイツキリスト教の侵攻を阻止することはできなかった[11\*]。ひどい「統制」が始まった。国家社会主義の目標は不動であった。民間の福祉活動は徐々に封じられていった。1932年に創設された国家社会主義国民福祉は無制限な権力行使を始めた。1933年と34年、国家社会主義が冬の救援事業を始め、今まで民間福祉連盟が共同で行なってきた「冬の救援」と交替した。彼らは声を荒らげる心理的情宣活動の中で、これを完全に新しい事業だと表明するようになった。これまで冬の救援は、困窮した住民の食費、衣類と暖房の莫大な総額を毎年調達していた。1934年からの新しい募金活動法は、許可申請を義務づけたすべての公的募金活動を明らかにした。内国伝道はこの法によって、3年のうちにすべての公的募金活動の可能性を失った。わずかに内国伝道の献金の日だけが教会の礼拝の中で必要な資金を捻出できただろう。教会と内国伝道とはここで最も親密に結びついた。

カイザースヴェルト連盟、ツェーレンドルフ福音主義ディアコ

ニー・シュヴェスター連盟、マールブルク・ドイツ・ゲマインシャフトディアコニー連盟、そして他の福音主義と自由教会シュヴェスターのディアコニッセたちは、すでに1933年6月にそれらを「統制して一本化する」ために、帝国同業者団体にドイツのシュヴェスターと看護婦たちを統合した。だがそこでディアコニッセたちは、その数8千人を超えないNSシュヴェスターを、これに対立する約7万人の福音主義シュヴェスターと入れ替えようとする試みに、同調しなかった。

「公共生活の脱宗教化」を唱える人たち列の中で、人は他のやり方をするすべての養成学校のように、幼稚園女教師養成所、幼稚園を、内国伝道から取り上げた。

1935年にローゼンベルクの『神話』に反対する本を『神話への応答』という題で書いた当時ベルリンの私講師リック・キュネトが指導していた護教センターは、1937年指導部の激しい追及によって解散させられ活動を禁じられた。

内国伝道は、その施設とともに国家社会主義の世界観を持つ国家の邪魔になった。だが、彼らはそんなに急に排除されたわけではない。21万2千のベッドをもつ彼らの施設だけは、閉鎖されていく福祉のなかで放棄されなかった。それらを受け継ぐための代用職員は、国家社会主義の自由にまかされていたわけではない。孤立した施設と設備のみが実力行使によって取り去られ、国家社会主義の別の施設に変えられた。他の施設は、内国伝道から強制的に買い取られた。けれども世間はまばゆい光だけを見ていた。人は隠れてなされる闘争を好んだのである。

内国伝道は、施設を、規模によって、多様な方法で公共機関の福祉職と結びつけた。国は外的には教会と内国伝道を無理に一緒にしたが、内的には変えられないとはっきり分かった時、1938年から公然と野蛮な排除をするようになった。彼らはずいに多くの理由から、とりわけ、最後には第2次世界大戦の破局に導いた大きな政治問題のすべてにおいて、国家社会主義の指導を過度にし、失敗した。彼らはこれらの破壊から自由になる方法を知らなかった。

彼らの教会離脱宣伝は、ほとんど6%の人たちも教会から連れ出す

ことは出来なかった。彼らの講習会活動はすべての国民に行きわたったわけではなかった。増加する内部の抵抗運動は、新しい国に制約を加えた。教会闘争は、国がもはや十分に把握することが出来ない状況をつくりだした。この関連でいえば、内部の抵抗運動も内国伝道内の職員の列の中で補強された。

それに加えて、全体主義体制の内部では諸党間にありふれた嫉妬からの嫌がらせと権限争いが起こっていた。国家社会主義はシュヴェスター制の上にあるディアコニッセの家を征服しようとした。「帝国シュヴェスター連合」はそのために使われた。そのうえ、それは国家社会主義「ドイツ女性事業団」を超えたものにしようとした。ついに、「帝国医師の指導者」がそこに駆り立てられた。この混乱の中で、シュヴェスターたちは進んで看護婦長シュヴェスター・アウグステ・モルマンのもとに集まり、ひそかに「ディアコニー協会」を結成した。1934年11月15日、ディアコニー協会は「社会福祉と医療業務の職務を行う帝国活動協会」の中に合併され、それは新しい国家社会主義の枠の中でなされたのであるが、福音主義シュベスター制度の精神の中で、母エバの歌『アンキラ・ドミニ』[ancilla domini]を、内的福音的義務の証として鳴り響かせた。中心にはカイザースヴェルト母の家ディアコニーの「指導者」、伯爵ルティヒャウ牧師の話があった。

そこで、すでに早い時期から、国家社会主義がキリスト教にみせかけている面と、常に新たな破壊的な反キリスト教の特徴をもつ面との、2つの面に直面して、外交的には策動し、回避したり、また引きとめたり、反対者には秘密を守るということを行った。

中央委員会の中で「統制された」重要人物と言われる人たちの内国伝道は、1934年秋に、外国伝道と手を結び、一方でドイツ福音主義教会の伝道とディアコニー連盟との共同事業を目指す、教会闘争は頂点に達した。フリッツ・フォン・ボーデルシュヴィンク牧師、伯爵ルティヒャウ牧師、そしてベルリン伝道局長ジークフリート・クナックからなる同胞評議会は、責任を引継いだ。帝国監督が指名した2人の代理人は、内国伝道中央委員会で、「内国伝道に対する党の機関による多くの攻撃をそらし、撃退に成功した非常に多くの内国伝道の活動があ

ることを知った。」中央委員会の個々の部局は、多くの人に認められ、更に活動することが出来た。[12]

1934年、プレーメンのディアコニッセ母の家の責任者コンスタンチン・フリックは、牧師会長として、ボーデルシュヴィンク、ルティヒャウ、そしてブラウネ牧師と共に中央委員会の先頭に立ち、ベルリン近郊のボーデルシュヴィンクの施設、ホフヌンクスタール[希望の谷]の指導者を副委員長として、総統の歌ではなく、福音の歌声に耳を澄まして聞いている限りは、ドイツ福音主義教会内で教会民の信頼を集める明確な道を進んだ。人は共同作業の中で、また中央委員会の中で、バルメン宣言教会会議の決議に賛成した。だが教会闘争のなかで、ひそかな準備がなされていた。そこで、人は施設の業務に対する責任を果たし圧力から彼らを守ることができるだけであった。

1938年8月、アウグスト・ヴィニツヒとルドルフ・アレクサンダー・シュレーダーが中央委員会に招かれた時、それは立ち直るきっかけを与えた。

総監督ツェルネルは帝国教会委員会長として短い活動期間の間に1936年4月、内国伝道が譲れない教会の事業を表明することに成功した。細分化された中央委員会の加盟事業団は、帝国教会委員会の布告によって、体制教会の中に法的に定められた。

「内国伝道の最高自治組織はドイツ福音主義教会中央委員会である。中央委員会はドイツ福音主義の指導部と親密な関係をもって働き、彼らから公然と内国伝道の利益をとりわけ国と党も代表するように明確に委託されている。」[13]

そこで、彼らの活動を守った内国伝道と、内国伝道を弱らせようとする国家社会主義国家の間の闘争は、行きつ戻りつしながら揺れ動いた。

この国家は、2つの巨大な宗派[カトリックとプロテスタント]の内部にそのような強靱な抵抗勢力があるとは、予想していなかった。それに対して国家社会主義が第2次世界大戦中に投げかけた最後の大きな一撃は、ほぼ完全なキリスト教出版の活動停止であった。1,400万人から1,500万人の福音主義出版物購読者から、また学術雑誌から教区

便りにいたるまで、なお何らかの地味なキリスト教新聞を購入するかもしれないわずかに10万人あまりの人が残っていた。「戦時経済の要請」だからといって禁止は偽装されていた。

戦争の間、内国伝道は、ある所では国家社会主義国家を阻止し、越えようとしても越え得ない壁を築くことだけができた。

国家社会主義の人種の優越妄想をもつ人たちは、すでに1934年、常設の人種衛生法と人種保護問題委員を任命するように内国伝道中央委員会を説得した。その時、内国伝道はある種の病気の人たちになされる断種・不妊手術を非難すべきだと、はっきり言わなかった。だがベルリン会議は印象的な人数で始まった。欠陥のある人を収容した内国伝道の施設で、年間を通じて遺伝病の子孫を予防するかなりの貢献がなされた。10年の間に、1万人の被保護者のなかで、妊娠した者は年平均2人だけであった。キリスト教の牧会は、その人が自分の意志で子孫を断念するように決心させることに成功した。

ヒトラーはこの明白になった事実に満足しなかった。彼は1939年9月1日「激しい殺意をもって」個人的な「秘密の布告」を發布した。特に、決められた若干の医師たちに、病状調査によって不治の患者と判定した人を「安楽死」させてもよいという承認を与える全権を委任した。1939年秋と1941年の秋の間、総統の秘密の命令によって、およそ8万人が毒ガスで殺されるかあるいは薬殺された。偽装組織はこの殺人計画を秘密にし、分別をなくした医師たちをさがし、保証しなければならなかった。

この行動は秘密のままではなかった。1940年夏の間、国の施設内で殺人が行われているといううわさが広く知れ渡り、キリスト教の施設からも突然患者があちこちに連行され、そこで彼らは短期間に亡くなり、家族に報告される前に「衛生上の理由」で、死体の火葬がなされた。患者が選出された施設では、死の恐怖が雷雨の前のように患者の多くの人の心に広まった。それは帝国の施設にいる何千人もの被保護者の心を襲った。

1940年秋、南ドイツ行動後、ヴェストファーレンでも同じように「安楽死」の痕跡が見られた。その時、ベートル施設責任者、フリッツ・フォ



ン・ボーデルシュヴィンクは断固たる抵抗をするように召されていると自覚した。

「おそらく、父と子という2つの連続した世代がイエス・キリストの教会に重要な意味を持つ事業を贈ったこと、それは、これまでの教会史の中で私たちのだれもしなかった経験である。すなわち、イエス・キリストの可視的な教会が人間の間が存在する限り、彼らが生きた直接の場だけで模範的というのでなく、また彼らが生まれて生きた時代だけでなく、その時代を超えて向こうにある永続的な世界に失われないうで保たれる重要な意味を持つ事業を贈った。」<sup>[14]</sup>

フリッツ・フォン・ボーデルシュヴィンクはおなじ能力をもつ彼の父の後継者であった。彼は1877年8月14日に生まれ、1910年、父のベートルの遺産を受け継いだ。ヒトラーの秘密情報員、「帝国監督」ルートヴィヒ・ミュラーが、帝国監督の職から排除したボーデルシュヴィンクという名前は、ドイツ国民の歴史認識の中にいまなお深く刻印されることになった。

このベートルのひじょうに偉大な指導者は、秘密の総統指令が彼の施設も被害なしにすませることはない気づいた時、関連した問題を包括的に検討して準備を整えた。ベートルにいる患者は大部分が幸いなことになにも知らされていないかった。

ボーデルシュヴィンクは、この抵抗をするにあたり、公にする方法をとろうとしなかった。彼はこの行動のために責任を負う人たちを得ようとした。彼はついにキリスト者医師、博士ゲーリンク教授の仲介きめによって、歯きめに衣を着せずに書いた手紙を、1941年1月6日帝国元帥げんすいゲーリンクに伝えた。ボーデルシュヴィンクの申立てが正確でないとか正しくないといった返事はこなかった。だが、ヒトラーの侍医ブランド博士は、フォン・ボーデルシュヴィンク牧師と個人的に協議するようにという指令を受けた。ブランド博士がベートルにおいて医師の委員会がすでに活動をしていることを知ったとき、殺される患者の幾人かの選択がされているだろうと思った。ボーデルシュヴィンクは、ブランド博士と幾人かの帝国の責任者と何回も協議し、この「計画経済措置」の中止に成功した。

「この介入によって、多くの人が、傍若無人の残酷なことがなされて人々を不安にするなりゆきを見ている。私たちのまわりの諸国民は同じ印象をもっている。世界の歴史は、いつもその時が、最後の審判である。それゆえ私は、ドイツ人の多くの母たちが、私たちの国民がおかした罪の責任を息子たちの血をもって支払わなければならないことを恐れるのです。」[15]

そのようにフリッツ・フォン・ボーデルシュヴィンクは1941年8月の、とりわけ、ベートルでの行動だけを初めて中断させられた医師ブランド博士にあてた手紙に書いている。

またシュトットガルトの福音主義監督D. ヴルム、ミュンスターのカトリックの監督ガレン伯、そして数え切れない兄弟姉妹、精神病院と救護施設のそれぞれの医師と牧師たちはこの闘いを支えた。それは、施設への脅迫に対し、たびたび必死の手段で、偽装した策略で、生きている人に交付された死亡証明書で、法の網をくぐり、あるいは収容所移送命令の引きのばしをはかって、闘われた。ベルリン近郊にあるホフヌクスタールの責任者ブラウネ牧師は、「安楽死作戦」に反対する詳細な陳情書の作成を、何ヶ月もゲシュタポ[国家機密警察]のように引受けねばならなかった。ザウエルブルッフ教授は、法務大臣との関係をつくって、この抵抗運動を支援した。だがボーデルシュヴィンクの戦いは無類のものであった。責任者との2人だけの内密の会談、この中心人物をめぐる対決、といった他の誰も成功できなかったことを彼は可能にしていた。なお、ニュルンベルクの裁判で、処刑前のヒトラーの侍医、ブランド博士の最後の言葉が念頭に浮かんでくる。彼の前に立ちはだかったのは、ボーデルシュヴィンク牧師ただ一人だった。彼は何時間も対決し、会談が終わった時、次のように言っている。「これは私の生涯の最も厳しい闘いであった」.[16]

この努力によって3千人の患者がヒトラーの「安楽死」から救われた、そして、行動全体の停止を闘いとるようになった。

戦争の破局が突然自分たちの国ではじまり、その戦争の現場になっていった時、とりわけ、ライン・ルール地方の施設は航空戦の恐怖に苦しまなければならなかった。1945年1月29日、およそ2万5千の

焼夷弾しょういだんがベートルの敷地に投下され、約千人の患者が一日にして彼らの住まいを失った。シュヴェスターたちは、老人たちを背中に背負って施設から運び出した。

これは爆弾の打撃の下で苦しんだ一例に過ぎない。無傷の家と施設の中では、みんなが互いに親しみを増し、間もなく東から流入してくる避難民のために場所を準備した。内国伝道の全損害は財産価値で言えば4億帝国マルクと概算されている。

結局は、諸施設は戦争の時も炎と恐怖の中で自立していた。連絡は互いに中断した。東からやってくるいつまでも続く避難民の列の中に、その地の内国伝道の施設に収容されていた人たちが、男女の看護士と、ディアコニッセたちを伴って、西にやって来た。1933年のカイザーヴェルトの100年祭の時、ドイツ福音主義協会の7万人のシュヴェスターのことが話された。彼女たちはおよそ5万人を破滅から救ってきた。その中の1万1千人が東で彼らの故郷を失った。22のディアコニッセ母の家が種々の兄弟の家と同じように、放浪をしなければならなかった。

多くのディアコニッセたちが破滅の際に避難民の流れに加わらなかった。彼女たちは残された共同体にいるか、あるいは彼女たちの被保護者たちのもとにとどまった。彼女たちは軍当局と交渉し、礼拝を引き受け、彼らの死に至るまで、あるいは回復するまで、その役目を最後まで果たした。

ディアコニッセの家については、ミットアウエル・ディアコニッセの家はブロムベルクに移された。そこで牧師、福祉施設長、すべてのシュヴェスターたちが共に命を失った。[17]